

# 大宅壮一の文化大革命レポート

藤 井 淑 禎

大宅壮一の研究がようやく動き出そうとしている。

松本清張と並んで戦後日本を代表する巨大な存在、大衆のほうを向いた稀有なマルチ文化人、でありながら、なぜかこれまでその仕事が顧みられることはほとんどなかった。それが、近年、阪本博志氏の「大宅壮一研究序説―戦間期と昭和三〇年代との連続性／非連続性」(『文学』二〇〇八・三―四)が出て、新たな展開が期待できそうな状況になってきた。

そこでボクもこの機に乗じて、だいぶ以前に中国の大学で開かれたシンポジウムで口頭発表した、その草稿を引っ張り出してきて、もう一度自分なりに考え直してみようと思っただけである。発表の際の原タイトルは「高度成長期日本の中国像―大宅壮一と松本清張の場合を例とし

て」というものだったが、ここでは、大宅壮一を中心としてまとめ直してみることにする。

今回のタイトルからもわかるように、本論の中心は、大宅壮一と中国の文化大革命(一九六六―七七)との関わりだが、現在ではあの大宅壮一が文化大革命真っ盛りの中国を訪れたことなどはとうに忘れ去られているが、当時は、巨人大宅が激動の中国を探訪したことは、最大級の話題だったのである。

大宅を筆頭に、他に三鬼陽之助、藤原弘達、大森実、梶山季之、といった評論家・小説家たちを加えた総勢五人は「大宅考察組」と呼ばれ、他に半ば事務方として、電通顧問の小谷正一、ニュース・キャスターの秦豊も同道した。

『サンデー毎日臨時増刊』「現地全録音・大宅考察組の中共

報告」(一九六六・一〇・二〇)によれば、一行の旅程は、九月九日に香港、そして翌一〇日に広州に入り、以後、上海、無錫、南京、天津、北京、武漢と回り、九月二四日に広州に戻り、翌日香港に帰着している。その間、香港―広州間、上海―無錫―南京間は鉄道、天津―北京間は自動車を利用してはいるが、それ以外はすべて空路である。



この探訪の記録としては、『サンデー毎日臨時増刊』「現地全録音・大宅考察組の中共報告」がもっとも大がかりな

特集だが、他に『週刊読売』(六六・一〇・一四)と『サンデー毎日』(六六・一〇・一六)も、グラビアと特集記事にかなりのページを割いている。

この、九月中旬という時期から考えると、文化大革命の勃発を受けて急ぎよ訪中、と受け取るのが普通だが、実は訪中計画自体は「三月も半年も前から計画していた」ものだったと言う。

たまたまわれわれが選んだ時期が、ちょうど文化大革命とか紅衛兵問題とか、中共が非常にゆれている最中におつかったのは、非常にタイムリーであったと思います。これは予期せざる大きな収穫だと思えます。

〔現地全録音・大宅考察組の中共報告〕中での大宅発言)

いま『近代日本総合年表』(一九六八)で文化大革命の動きを少しだけ見てみると、紅衛兵組織が最初に結成されるのがこの年の五月のことであり、八月には、文化大革命に関する一六条の決定、天安門前広場での紅衛兵らの百万人大集会がスタート(十一月までに計八回)、と、大宅考察組の訪中がまさに文化大革命の勃発と見事にぶつかって

いたことがわかる。「非常にタイムリー」と言い、「予期せざる大きな収穫」と大宅が大きな声をあげたのも、もったもなことだったのである。

\*

ところで、大宅考察組の訪中目的が文化大革命の取材や調査でないとするれば、その目的は何だったのか。大宅は先の「現地全録音・大宅考察組の中共報告」での発言中で、そのあたりのことについて、こんなふうに言っている。

私たちは中共から招待されて訪れたのではなくて、すべて自弁で、しかも一人当たり相当な金額を払いこんで中共へ来たわけなんです。ということは、経済的にスポンサーがないというわけだけではなくて、イデオロギー的にも、立場の上からも、スポンサーなしでできるだけ公正というか、自由な立場で新しい中共を見たいということをし、三月も半年も前から計画していったんです。

実は大宅にとつては、この「自由な立場で新しい中共を見たい」というモチーフは、『サンケイ新聞』に六〇年七月から翌年一月まで連載された「黄色い革命・黒い革命」

(のち『黄色い革命』として刊行、六一・八)以来のものだったのである。

『黄色い革命』の「あとがき」で大宅は、「第二次大戦後、中国をはじめアジア各地でおこった社会革命は、『黄色革命』で、一、二年前からアフリカにおこっている独立運動は、『黒色革命』ともいべきものである」として、「現在、全世界を風靡しているものは、ものすごいナショナリズムの嵐である。これに対して社会主義(又は共産主義)と民主主義が、どのような形で融合し、反発したりしているかということを見とどけたい」と述べており、民族主義、社会主義、民主主義の三つともえの争闘への強い関心を告白している。

「黄色い革命・黒い革命」の連載は結局後半部分を欠いたために『黄色い革命』として刊行されたが、そこで取り上げられたのは、台湾、フィリピン、シンガポール、マラヤ、タイ、ビルマ、南ベトナム、カンボジア、ラオス、インドネシアといった国と地域であり(いずれも当時の呼称による)、単行本の「あとがき」中の「アジア各地でおこった社会革命は、『黄色革命』という定義を越えて、より広く、アジア各地の戦後の新体制を見聞・検証する内容になっている。

その一回目は台湾だが、その冒頭では、各国歴訪の旅が単なる新体制の見聞・検証ではなく、それを通しての戦後日本の再評価、再検証の試みでもあることが表明されている。

私のこんどの旅行の主たる目的は「大東亜戦争」に關係のあった国々を片っぱしからまわって、戦後十五年を経た今日、これらの国々に、戦争のツメ跡がどのような形でのこっているか、そしてどのような成長ぶりを示しているか、あまり成長していないとすれば、その原因はどこにあるのか、といったようなことを検討することであった。別な言葉でいうならば、これらの国々の「勤務評定」をすることだ。しかし、あとになって、これらの国々の「勤務評定」をするというのは、実は日本自体を「勤務評定」することだということに気がついた。アジアの中の日本、世界の中の日本を新しい目で見なおすことだ。したがって、私がこれから書こうとすることは、旅行記であるとともに「大東亜戦争」の清算書、新生日本の自己批判でもある。

「勤務評定」というのは当時の流行語で、とりわけ教員

に対するそれが保守と革新の間で長期にわたって政治問題化したことで有名になったが、意味自体は文字通り仕事ぶりをどう評価するかということだ。アジアの国々の戦後の復興ぶりを採点するという行為が、ひるがえって戦後日本の「勤務」ぶりについても考えさせる契機になった、と言っている。

この『黄色い革命』の旅では中国を訪れることはできなかったが、「新しい中共を見たい」（前出「現地全録音・大宅考察組の中共報告」という思いを何年後かに実現したのが大宅考察組の訪中だったわけで、だとすればそれは「日本自体を「勤務評定」する、言い換えれば戦後日本や戦後の日中關係を見直すことにもつながっていたのである。

\*

前掲の発言中で大宅が「私たちは中共から招待されて訪れたのではなくて、すべて自弁で、しかも一人当たり相当な金額を払いこんで中共へ来たわけなんです」と過度に強調していたのも、それまでの日中關係の歪みを強く意識していることにはかならなかつた。「ということとは、経済的にスポンサーがないというわけだけではなくて、イデオロギー的にも、立場の上からも、スポンサーなしでできるだけ公正」に、という物言いが歪みの背景を正確に補ってくれて

いる。

たとえば『週刊朝日』五四年九月一九日号には「中共しきりに『招く』—カネに糸目をつけぬ『平和外交』』というタイトルで、「旅費は『アチラもち』」との小見出しのもとに、次のような記事が載っている。

第一級の待遇にせよ、第二級待遇にせよ、「招待」をうけたからには、旅費、宿泊、飲食はすべてあちらもちとなるし、貧乏日本人にはもったいの幸い。アチラにとつては、日本人の百人や二百人を「招待」するぐらいなんでもない。(中略)「平和外交」を推進するためには、カネに糸目をつけないのだ。戦争する費用にくらべると、まったくおやすいことである。このように、日本人が「アチラもち」で出かけるのは、なにも中国だけのことではなく、それ以上の多数の者が「アチラもち」でアメリカにも出かけている。「アチラもち」はまさに戦後日本の特殊現象というものだ。／＼ともかく、中共の「招待政策」は、日本において徐々に効力をおさめつつある。国会に「日中貿易促進議員連盟」が生まれていること、李徳全赤十字会長らの招待に関する決議が行われたことなども、その一例であ

ろう。

こうした「招待政策」の「効力」の一例として、たとえば谷川徹三の「中国とソ連を訪ねて」(『中央公論』五六・一一)という文章をあげてみてほしい。「ソ連でも中国でも私は主として古美術を見て歩いた」と、文化的なニュートラルな訪問であることを強調する一文で始められた谷川文だが、中途からは新中国を賛美する調子が目立つようになる。ソ連と違って「中国においては私は何よりも新しい中国と中国人とを感じたのである」、「どこへ行っても、何か生々した緊張がある」、政治・経済・社会・生活等についての人々の「学習」の「効果は極めて顕著に現われているようである」、「新しい人間を造る仕事は最も大きな仕事として、今日の中国で考えられていることは明か」、「私の接した限りの人々は、今日の生活に生き甲斐を感じ、喜んで新しい建設に協力しているように見えた」、指導者たちの給料はきわめて安く権力の腐敗は「新中国の上層部については未だ絶えてこれを聞かない」、民族的伝統や宗教は尊重され「少数民族政策にははなはだ意を用いている」、「百家争鳴」的に「投書その他による批判が自由になったという」、等々といった具合である。

「招待政策」の受益者たちが美化された中国イメージを振りまいていたというわけだが、大宅は、彼らが他方では誤った日本イメージを中国側に広めていることにも厳しい眼を向けている。

（欧米から独立した中国と違って——藤井注）逆に日本はアメリカにいい属しているではないか。一刻も早く独立すべきであると（日本人招待客を案内する中国側の人間が——藤井注）いうんですね。そして独立するためには中共が手をかしてもいい。あるいは日本は中共にたよらねば独立できないという印象を与えるようないい方するんだ。／いままで、訪中した四千も五千もの日本人がそういう演説を聞かされてそれが一つの慣例になっているんだね。いかに日本国民が悲惨な状態にあるかというようなことをさんざんいわれ、日本人の中にもまたオーバーに日本が悲惨だというようなことを伝える人がいる。しかし、彼らにそういう考えをいだけせると、彼らはますます日本に対し強い態度をとったり、軽べつしたりするようになる。これはほんとうの日中関係を誤るものだ。だからこれからの中共に対する旅行は、もつと自主性をもった旅行、

「自主旅行」というものをしなければならぬと思うね。

（「現地全録音・大宅考察組の中共報告」中での大宅発言）

大宅考察組から大宅、三鬼、藤原の三者を招いておこなわれた「日出造対談『やアこんにちはワイド版』」<sup>1</sup>「ありやあラツキョウ革命だ」（『週刊読売』六六・一〇・一四）の中で三鬼が問題にしている、「日本人は、ほとんどことごとく佐藤内閣反対で、安保反対だと思っている。そうして、中国に対する理解者で埋まっまっている、という見方」なども、やはり「招待政策」の受益者たちが振りまいたものだったのだろう。

「日本の実態を中国に知らせるといことですね。日本人みんなが、招待されて無条件降伏するような人間じゃないんだ、ということを知らせる。／とにかく、中国ご用商人や、文化人の中の中国奉賛会員（笑い）こういうのが対日認識を誤らせている」というのが大宅の結論だが（同前）、そうした、それまでの歪んだ日中関係を踏まえての「招待されて訪れたのではなくて、すべて自弁」の強調だったのである。

\*

中国を「勤務評定」することは、日本自体を「勤務評定」することにつながり、そうすることで戦後の日中関係を見直し、歪みがあればそれを正そうとする。それが大宅らの目指したことだったのだが、そうした観点に立った時、「招待政策」の受益者たちに代表される人々が美化された中国像を日本人に向けて発信するいっぽうで、実態とはほど遠い日本像を迎合的に中国側に紹介する、そうした振舞いこそが、両国の真の相互理解を阻んでいた元凶であることがあぶり出されてくるのである。

こうした理由以外にも、そもそも両国にはこの時点で国交がないこと、先の戦争で犯したことへの罪障意識ゆえに接近をためらう気持ち、さらには戦後復興にかける日本人の目もつばら欧米に向けられてしまったこと、なども両国の歪んだ関係、疎遠な関係に拍車をかける結果となっていました。

「近くて遠い関係」というのが、長い間、両国の関係を評する際に使われた表現だが、たとえば『サンデー毎日』五八年四月六日号の「特集 中国はこう変わった」は、「新しい『国づくり』」、「日中交流の二つのハシラ」、「生きかえる文化」、「新中国を作る人々」、「わたしはこう見た」

という五つの柱を立てて、最初の柱である「新しい『国づくり』」には「日本人だけが知らない国」というサブタイトルを付している。その中身は「揚子江大橋―実現させた『民族の夢』」、「上海―ぬぐい去られる暗黒面」、「農民―『合作』組織で築く新生活」、「チベット―道路でひらく辺地の産業」の四つから成るが、その前書はこのようになっている。

近くて遠きは日中のなか――／公式の政治交渉ばかりをいうではありません。わたしたち一人々々の気持ちも含めたいのです。世界に国々は多いのに、日本人が知らないのは新中国だけ。世界中の国々が新中国に関心を寄せているのに、理解していないのは日本だけ。やがてそんなことになりはしませんまいか。／しかも歴史・地理・文化・経済、あらゆる面からみて、あすの日本が最も深い影響を受けるのはお隣の中国だといふのに。

「近くて遠い」という表現は、この八年後の、例の『サンデー毎日臨時増刊』中にも、「『近くて遠い』この隣人」というかたちで出てくるが、同じ頃の『文芸春秋』六五年

八月号の七〇ページにも及ぶ大特集「現代中国一〇〇問一〇〇答」も、「近くて遠い」関係を前提にしなければ理解しにくい特集だろう。「米ソと対抗し社会主義社会に挺身する毛沢東以下七億の人民たち！ 彼らは何を考え、どんな生活をしているか？ その実態を糾明する」との前書きで始まる「一〇〇問一〇〇答」には、「料理店、酒場はあるのか」、「非行少年は存在するか」、「旅行の自由はあるか」、「女性の社会的、家庭的地位は？」、「税金はどうなっているか」、「資本家たちはどうなったか」、「中国要人の私生活は？」、「毛沢東の後継者は？」等々の、硬軟取り混ぜた一問一答が並んでいる。いずれも近くて遠いがゆえの疑問ばかりなのである。

\*

このような「近くて遠い」、もどかしい隣国関係にあった中国を、『黄色い革命』ふうに言えば、中国の「勤務評定」を通じて日本自体を「勤務評定」し、中国と日本の関係を「新しい目で見なおす」ために、さらに、より具体的には「経済的にスポンサーがないというわけだけではなく、イデオロギー的にも、立場の上からも、スポンサーなしでできるだけ公正というか、自由な立場で新しい中共を見たい」（『現地全録音・大宅考察組の中共報告』）との理

由から、大宅考察組の中国訪問はなされていたのである。「いままで中共を見てきた人は、大部分が招待された人、あるいはもと軍人とかなんとか、古い中国に対して非常にあこがれを持っているような人たちが多かった。ところが、われわれのほうは、あんまり先入観なしに新しい中国を見よう、しかもゆれている中共を見よう——ということになったわけなんです」（同前）。

ここで彼らの足跡を、訪問地とそこでの行動とが詳しく目次のかたちで示されている「現地全録音・大宅考察組の

19 サンデー毎日臨時増刊

**現地全録音** 本誌独占

**大宅考察組の中共報告**

● 入国第一日目に早くも紅衛兵  
● 中山大学生と大学招待所で盆鼓会  
● 飛行機、くるま、女性、おしゃべり  
● 人民公社で農民と食事しながら  
● 写真撮影中、群衆に包囲される  
● 錦忠公園で四旧追放運動に会う  
● 人民商場、デパートの中の民衆  
● 皮革工場の労働者と賃金問題  
● 天安門でお上りさんの紅衛兵と  
● 清華大学紅衛兵80人と大討論会  
● 趙安博秘書長とはげしい応酬  
● 解放軍第196師団の訓練を見る  
● 総まとめ 曹楚平インタビュー

大宅 社一 勤達 史之  
三知 野 森 大 祝 山 季  
小 野 正 一 雄

「グラフィック」考察組「長征5000+」 大宅考察組一行撮影

文化大革命のすべて  
二つの国慶節—この年よく見たい—真実を語る 118  
七億の「毛沢東」を決起させたもの 柳井隆雄 119  
毛沢東—文化大革命の「総動員」 眞木 隆二— 124  
近くて遠いこの隣人—日中交渉開始の歴史—

スゴい  
中共の政治体制 81  
中共の軍事力 81

中共の外交  
文化大革命の外交 84  
党中央憲法改正の経緯 85 中国新憲法第一巻— 84

アンケート  
① 米中戦争は起こると思うか 180  
② 日中関係はどうすればよいか 180

◎ 毎日出版 1966年



中共報告」に基づいて、簡単に紹介しておこう。詳しくは目次図版を見られたいが、「全録音」というのは、夜の仲間うちでの検討会や紅衛兵との討論会をすべて録音し、それらを文字に起こしたという意味である。

「大宅考察組」は、文化大革命下の中共で、なにを見、なにを体験し、なにを感じたか——これは帰国後の感想ではなくて、ナマの現地報告です。／一行は、九月十日から二十六日まで十七日間にわたって、広州をふり出しに、上海、無錫、南京、天津、北京、武漢の各地をたずね、「招待客」ではない、「一般旅行者」として、この異常な革命を体験しました。そして、学生紅衛兵との討論会、人民公社、解放軍の見学、中日友好協会秘書長、趙安博氏との会見など、精力的に取材し、毎夜、その見聞を持ち寄って検討会を開き、それを十五本のテーマに録音して帰国しました。／この臨時増刊号は、そのテーマによる現地全録音を再生したものです。／したがって、「紅衛兵旋風」の発火点となった清華大学紅衛兵との討論会、中山大学（広州市・藤井注）学生との座談会も、そのまま再現されています。また一行の最初の印象とあとでの感想のちがいが、



意見の対立もそのままに出ています。

〔現地全録音・大宅考察組の中共報告〕前書き

目次図版に基づいて言うと、「特別録音・中山大学生と  
大学招待所で座談会」、「特別番組・清華大学紅衛兵六〇人  
と大討論会」の二つ以外は、夜、ホテルの大宅の部屋で持  
たれた検討会の記録ということになる。なお、「清華大学  
紅衛兵六〇人と大討論会」は『サンデー毎日』（六六・一  
〇・一六）にも転載されて、この号の巻頭を飾った。また  
「大宅考察組」という呼称は、大宅らが気取ってつけたも  
のではなく、北京から広州まで出迎えにやってきた中国人  
ジャーナリストらが付けた名前だとのことだ。実地に調査・  
観察して本質や真相を探る、というのがその意味である。

\*

目次からもわかるように、彼らは決して文化大革命ばか  
りに振り回されていたわけではない。広州・上海間では車  
や女性のおしゃれ、飛行機などにも目を向けているし、南  
京ではデパートも訪れている。話す相手も若い（幼い？）  
紅衛兵たちばかりでなく、人民公社の農民たちとか、皮革  
工場の工員たちとも話す機会を持っているが、「招待旅行」  
ではないにしても場所や相手のセッティングはあちら任せ

であり、そのへんをめぐってのストレスが北京での「趙安  
博秘書長とはげしい応酬」に結びついたのだろうことが察  
せられる。

強圧的で押し付けがましい案内者たちとの応酬は至ると  
ころに見られるが、そんななかで大宅らは、これからの日  
中関係のありうべき方向を次第に見定めていく。かつての  
ように互いに相手国の誤ったイメージに振り回されるので  
はなく、また「近くて遠い」もどかしい関係をも乗り越え  
るような方向を。

大宅らの結論、というか処方箋は、「現地全録音・大宅  
考察組の中共報告」を始めとする特集記事以外にも、当時  
大宅が『サンデー毎日』に連載中であった「サンデー時評」  
などにも披歴されているが、一言で言えば、それは、相手  
の実情を正確に知ったうえで相互理解と、互いの不干渉、  
とに尽きている。

「これとケンカすることはいけなないね。ケンカしないで、  
こういう国（ラッキョウ剥きのように次から次と内部批判  
をエスカレートさせていく——藤井注）だということを確認  
して、日本の実態を中国に知らせるということですね」  
（前出「ありゃあラッキョウ革命だ」中の大宅発言）。目次  
には「総まとめ」とあり、本文中には「ともかくも旅を終

えて」とある「現地全録音・大宅考察組の中共報告」の香港での最後の検討会（九月二五日）でのやりとり中には、「「ここでひとつ中共で感心したことを一つといやだったこと、感じの悪かったことを一つずつあげてみてくれませんか」（小谷正一）との総括的個所があり、各人がいろんなことを言っている。

「ぼくは国際外交問題の評論やる人間だから、この国がいいとか悪いとかいうことより、この国の実態をつかまえるということが一ばん大事だという視点をもってきたわけです。私自身は日本人だから和食がいちばんうまいですよ。そこで中国料理とはどんなものかということを見てあるいたわけだが、中国料理うまいかうまくないかといわれたらはっきりいいですよ。これうまいだろう、しかし、お前これ食えというようないってくれるな。こちら日本料理くえとか、アメリカ料理食えとはいわんから・・・」（大森実）。

「ぼくはこの人民のためにという標語のためにささげているいじらしさというもの、これはいまの日本が戦後もったブルジュア文化と彼らというであろう、また植民地的というであろう文化の中にはない。戦後、生活は向上したといいながら、なおかつもっているある種のむなしさを考え

た場合、中共から学ぶものはあると思う。それをいかに日本語に翻訳しながら正しく伝えていくか」（藤原弘達）。

「この国のやっつてることについていいか悪いかというのは、問題の設定自体に抵抗を感じるんだ。つまりむこうのやっつてることをいい悪いという権利はない。大宅さんが、あちらが日本のことについてとやかくいうことをおそれたと同じ理由でね。ただそれが相手を破壊する行為である場合には、たとえばアメリカの北爆、これには私は「待った」をいいます。しかし毛沢東が内でやっつてることには、干渉すべきじゃないと思うんです。これは両国の外交においてもしかりですよ」（大森）。↑「それはプリンシプルだな」（藤原）。↑「そのプリンシプルを確認する意味でも、こんどの旅行はぼくにとつて貴重な体験だったと思います。むこうは千年、二千年の歴史がある大きな国だ。日本は小さな海洋国家である。その大きな国の中のその相克をそのまま伝えることが重要なんだ。それがいいか悪いかなどという、将来の両国の関係をぶちこわすようなものになるかもしれない」（大森）。

実情を伝えあうことと互いの不干渉と——スポンサーなしの自由な立場から、先入観をなしに新しい中国を見ようとの大宅考察組の斬新な企ては、かくしてシンプルではあ

るが大きな収穫を手に入れることになったようである。

もつとも、リーダーである大宅は、「ぼくはこの国にきて、まったく異質的な、日本とは根本的に違った国のあり方というものを見たわけです。ひと口にいうと、中国の文化は一種の巨大文化。だから日本のような小さな島国からでけると、みるもの大きくものすべて、巨大なものにうたれて頭があらがないという感じになってしまう。(中略)

この国から学ぶべきものはたくさんあるけれども、やはり日本人としては国の性格、目的が違うんだということを腹にすえてこの国をみなくちゃいかん」と述べて、他のメンバーたちとはやや違うトーンでこの旅を締めくくっている。実態の直視と相違の自覚と、という点では他のメンバーたちと重なるものの、最後に漏らした「たよるべきものは力のみ」という「この国の基本的な性格」へのひそかな警戒心は、ひよつとすると大宅ひとりを感じしたものだっただけかもしれない。

帰国後、大宅は前記の「サンデー時評」などを通じて、大宅考察組の収穫を広めていくことになる。「あざやかな三原色の国」(「サンデー時評」六六・一〇・一六)では、国同士が互いの実態を正しく伝えあうことの重要性を説き、そのためにも、デマや怪文書を戒め(「壁新聞と怪文書」

「サンデー時評」六六・一〇・三〇)、さらには「青少年の一大交歓会」などを催して「互いに好きなどころを好きないように視察」させる(「紅衛兵風の表と裏を抉る」『週刊文春』六六・一〇)ことの意義を説く、といったように。

\*

大宅考察組の訪中と望ましい日中関係構築のための提案から、すでに四〇年以上の歳月が経過した。その間に日中は国交を回復し(一九七二)、人や物資、技術、生産拠点など、さまざまなレベルでの交流はもはや飽和状態と言ってもいいほどに、密なものになっている。しかし、顧みて、四〇年以上も前に大宅考察組の前に立ちふさがった難問のいくつかは依然として解決されていないのではないだろうか。迎合的にまちがったイメージを流したり、相手に対する独りよがりな思い込みで固執したり、といったようなことは今でもしばしば両国の関係を損なっているし、また、そうした状況を打開すべく提唱された、実情を伝えあうことの大切さと、互いの立場の尊重と不干渉という「プリンシプル」すら、まだまだ十分には実行されていないのではないだろうか。さらには大宅が懸念した力への信仰は、海洋資源問題などといったかたちをとって、われわれを悩ませている。

その意味で、大宅考察組の訪中は現代にもつながる問題を提起し続けているとも言えよう。われわれはもう一度彼らの見たもの聞いたことを追体験し、彼らが記録にとどめておいてくれた中国の人々の言動をあらためて注視し、さらには、何よりも大宅考察組による提唱に謙虚に耳を傾けるところから日中関係を見つめ直すことが、いま必要なのかもしれない。

(立教大学文学部教授)